

俳句同好会

星野 猷二



夏の吟行に比叡山を予定していましたが、皆様夫々にご多用のため流会となり、兼題として作句されたものを持越しのまゝ、九月の吟行を迎えることとなりました。毎回ご指導を戴いていました久保白楊さんが、現職と協会役員を引退されることとなり、その激励会も兼ねて下鴨神社へ参拝吟行しました。今後俳句同好会には引続き御参加戴いて協力をお願いすることになっていきます。

第四十二回 平成四年九月二十八日(月)
八月兼題『夏座敷』『冷奴』『炎昼』『白南風』『蜥蜴』と当季雑詠

第四十三回 平成四年十一月十日
兼題『露』『秋祭』『そゞろ寒』『渡り鳥』『草紅葉』と当季雑詠

吟行 二条城前集合二条陣屋見学の後に神泉苑平八にて座句。二条陣屋の見学では消防設備協会事務局専務理事小川平太郎氏に大変お世話になりました。

兼題
ほろ酔えば 夕焼け空に 渡り鳥 四朗
賑やかな 客送り出し そゞろ寒 信子
青空に 輪を移しつゝ 鳥渡る 信子
川岸に 捨てバイクあり そゞろ寒 紫杏
顛えつゝ 白壁に這う 葛紅葉 景流
道端の 手相見ランプ そゞろ寒 紫杏
野仏や 草の紅葉に 座し給う 生雄
また逢わん 訣れ告げれば 雁渡る 景流
山の端を 一羽おくれ 鳥渡る 景流
稚児等ひく 御輿艶なり 秋祭り 景流
朝露を 連ねて光る 蜘蛛の糸 紫杏
歩き初め 転ぶ足元 草紅葉 信子
吟行
二条陣屋 歴史の窓に 秋入日 治吉
選に洩れた句
渡り鳥 終の勤めを 終えにけり 白楊
馬に騎り つづく神主 秋祭り 四朗
秋入日 漣まぶし 二条城 紫杏

九月兼題『とろろ汁』『栗』『月』『水澄む』『とんぼ』と当季雑詠

吟行 出町柳鴨川の河原より糺の森を経て下鴨御祖神社参拝の後、下鴨茶寮にて句座。

八月兼題

冷奴 夕餉短き 老夫婦 白楊
ゆったりと 手足伸ばして 夏座敷 景南
蜥蜴つと 庭下駄先を 走りけり 白楊
孫去りて 障子に穴の 夏座敷 景南
白南風に 目路の果より 波光る 白楊
風鈴も 簾もなく 夏座敷 紫杏
冷奴 夫とそれぞれ 日曜日 信子
炎昼に 睡りたまうや 石仏 景南
九月兼題
焼栗の 袋の温み 持ち帰る 白楊
一碗は とろろ汁あり 砂丘宿 生雄
月待ちて 月を見ぬ間に 酔いにけり 紫杏
後味は 爪のはさまの 栗の渋 紫杏
三味の音を 合す老妓の 敬老日 生雄
浮き止る 燈籠先を 糸蜻蛉 白楊

吟行

鴨社 御手洗川の 水澄みて 生雄
水澄める 鴨の河原の 鷺番い 景流
下鴨の 宮居鎮もる 秋の句座 景流
神木の 幣の白さよ 秋の暮 治吉
川かれて 糺の森や 秋の暮 生雄
せゝらぎ 糺の森の 彼岸花 景南

栩谷四朗が「時事通信社」の「週間時事」の俳句欄に投句され入選されましたのでここに掲載してご披露します。

お御輿の 足の揃ひし 秋の風 四朗

第四十四回 平成五年一月二十二日
於 協会事務所

兼題 年末年始に関わりあるものと当季雑詠
一碗の ぜんざい賜る どんど祭 景流
満天の 星を仰ぎて 年の夜 信子
惜気なく 柚子湯溢るゝ 真昼かな 白楊
ためらえば 足許あやし 注連外す 景流
受話器置く 訃報と届く 除夜鐘 紫杏
山間の 奥の山 初雪す 紫杏
御手洗の 杓皆かえて 初詣 白楊
猫跳んで 籬山茶花 散らしけり 景流
初湯出て 冷や酒とする めでたさよ 白楊

俳句同好会参加者

大和電設工業(株) 栩谷四朗
同和電工(株) 林 治吉
光星電工(株) 久保白楊
(株) 淀電気水道工業所 田中生雄
(株) オリヂナル電設 石崎景南
(株) トーエネット 新谷景流
(株) トモエ屋 星野紫杏
洛南電気工業(株) 原田 恕

俳句同好会

世話人 星野 紫杏

第四十五回

於 協会事務所
平成五年二月二十七日

兼題『湯豆腐』『節分』『梅』 当季雜詠 吟行
洛西梅宮大社梅苑より嵐山湯豆腐の嵯峨野にて句座

湯豆腐の ぬくもりのまゝ、長居辞す 景流
湯豆腐を 温め直して 夫を待つ 信子
日だまりに 酌み交わす友 梅の縁 四朗
甘酒の 旗も吊して 梅の宮 生雄
あま酒を 赤絨緞に 梅の句座 景流
梅の園 忽ち暮れし 香りかな 白楊
梅が香に つゝもれ居ます 梅の官 紫杏
梅花祭 舞妓の櫛も 梅の花 生雄
楼門に 酒樽かざり 梅の宮 陵南
梅映す 水の下行く 緋鯉かな 白楊
早春日 浴びてぬくもる 石の橋 紫杏
枝垂れ梅 人通すたび 風生る 景流
手焙りも 置いて梅見の 床几かな 生雄
老杉を 背に紅梅は 今盛り 紫杏
梅苑の 寂たる中を 独りかな 白楊
鶯宿梅の いわれ説きたり 謡の師 景流
人気なき 芦の丸屋に 梅咲けり 陵南

第四十六回

於 協会事務所
平成五年三月三十日

兼題『春の野』『独活』『陽炎』 当季雜詠

陽炎の もえて線路の 続きおり 信子
陽炎に 手を翳し見る 峠道 生雄
陽炎の 中に伴して 三輪車 信子
街に住み 忘れし春の 野の姿 白楊
澄し汁 うどの菌切れの 朝げかな 紫杏
春灯や 相撲話の 屋台店 白楊
濠繞り 風波止むなし 雪柳 景流

第四十七回

於 協会事務所
平成五年四月二十七日

兼題『藤』『春惜む』『燕』『若布』『灌佛会』 当季雜詠

行く春を ほしいまゝなる 八重桜 景流
きらめきて 宙を切りたる つばくらめ 景流
折詰の 隅に色そえ 新若布 陵南
たそがれに 未だ灯さず 春惜む 白楊
参道の 大藤古く 花すこし 紫杏
白藤の 映りしと 触るゝ水 白楊

第四十九回

於 協会事務所
平成五年七月二十七日

兼題『道』『川』『土用』『素足』『トマト』 当期雜詠

峡水に トマト泳がす 峠茶屋 生雄
荒南風の 榎木立を 吹き抜けり 景流
竹床几 片側あけて ビール待つ 生雄
横座る 素足の爪に 紅させる 白楊
塗下駄に 素足の娘やら ビヤガーデン 生雄
一湾を 見下ろす窓や 土用波 景流
一山に 盛られ無人の トマトかな 紫杏
土用婆 いましめくれし 食い合せ 白楊
ミニトマト 孫の食膳 誕生日 景流

第四十八回

平成五年七月二日

兼題『蟬蚪』『杜若』『嘸』『虎杖』『薄暑』 吟行
京都府立植物園 同園内レストランにて句座

生垣を 伝いて行けば 藤の宿 景流
老妻と 取る手のぬくみ 花冷えに 紫杏
木の芽摘む 指先匂ふ 夕まぐれ 景流
抗いて 流れに澱む 花筏 景流
春の海 磯笛渡り来る 灯台 白楊
灌佛に 来世を願う 媼たち 景流

不況が長引き夫々に苦しい業務の日常ではありませんが、時間の調整がつき易くなったこともあり、今年前半には五回の句会を開くことが出来ました。後半には新入の御参加の予定もあり、盛会を期待しています。また当協会会員各位より広くFAXによる季節々々の投句をお待ちしています。

俳句同好会参加者

大和電設工業 (株) 榎谷 四朗
光星電工 (株) 林 治吉
(株) 淀電気水道工業所 (株) 久保 白楊
(株) オリヂナル電設 (株) 田中 生雄
(株) トーエネツク (株) 石崎 陵南
(株) トーエネツク (株) 新谷 景流
洛南電気工業 (株) 屋 星野 紫杏
原田 恕

俳句同好会

世話人 星野 紫杏

残暑から初冬にかけて、俳句の題材の最も多い季節でありながら、皆様の御都合が折れ合はず、年末までに一回の開催に終わりましたが、投句されたものは力作揃いで、吟行も八幡市の特別史跡「松花堂庭園」を訪問し、同じ八幡市の「寿公」にて句座を開くことが出来ました。

第五十回 平成五年九月二十八日(火)

八月兼題「地蔵盆」「迎え火」「星月夜」

地蔵会や すくなき子等で 相撲とる

迎え火の 仄かに揺れし 気配して

九月兼題「虫」「秋」「月」「爽やか」

虫の音の やみて一時 闇深む

虫追える 兄の後追ふ 足つたな

ひとり居の 障子に虫の 影一つ

あるだけの 傘差しそえよ 萩の寺

尋ぬれば 夜目にもしるき 技垂萩

月天心 湖岸の灯 三つ二つ

切れくゝの 雲を渡りて 今日月

留守交番 萩投げ入れし 竹の筒

露天風呂 月を浮かせて 峽の宿

「松花堂庭園」吟行

萩叢が 女塚を覆ふ 松花堂

女郎花 萩も取りまく 女塚

腰おろす 石のぬくもり 秋日

景流

信子

生雄

信子

生雄

信子

白楊

信子

白楊

生雄

景流

生雄

紫杏



俳句同好会参加者

洛南電気工業(株)	原田星野紫杏	同和電設工業(株)	林治吉	大和電設工業(株)	栩谷四朗
光星電工(株)	久保白楊	淀電気水道工業(株)	田中生雄	石崎景流	石崎景流
オリエネル(株)	新谷景流	トーエツク(株)	星野紫杏	トモエツク(株)	トモエツク(株)

俳句同好会

世話人 星野 紫杏

今年一月から六月まで五回の句会を開くことが出来ました。この間に御参加の皆様のご協力を得て、三回の吟行を催すと云う今までにないすばらしい半年でした。

第五十一回

平成六年一月二十八日(金)

兼題 『晩秋』『年末年始に係るもの』

当期雑詠

吟行 『三十三間堂』句座『わらじや』

兼題句

いらえなき 扉に風花の 触れて消ゆ 白楊
初雪も だるまに足らぬ 幼稚園 生雄
一品を 買い忘れたる 歳の市 紫杏
片袖は 傘持ち添える 寒の雨 生雄
振袖が 屠蘇に頬染め 目を伏せる 四朗
寝積んで 眩ゆき会釈 交わしけり 白楊
咳きで 応えられたる 庫裡の冷え 白楊
魚焼く におい地を這う 冬の雨 紫杏
肩車 されし子吉兆 担ぎゆく 白楊
公園の 落葉ベンチに ならべる子 白楊
藤原の 運命悲しや 菊人形 陵南

煮凝の 目を剥く鯛の 兜かな 生雄
剪り刎ねし 蠟梅香り つゝ墜ちし 白楊
初髪は 束ねるだけの 古女房 生雄
賀状来ず また戦友の 一人減り 治吉

吟行句

朱の堂宇 しつとり濡らす 冬の雨 景流
千佛の 像にゆらめく 寒灯 景流
香煙に 燻る仏像 冴えかえり 景流
佛達 居並ぶ長廊 足寒し 景流
古佛おはす 千の想ひや 初句会 喜代治
通し矢の 御堂の外は 冬時雨 陵南
冬時雨 我も追はれて 堂に入る 紫杏
底冷えの 廊下で拝む 千佛かな 陵南
冬時雨 門前町の う雑炊 治吉

第五十二回

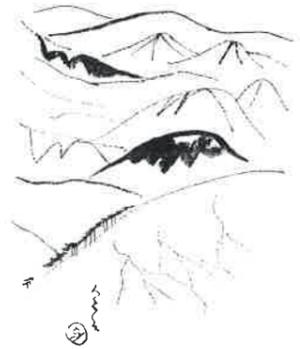
於 協会事務所

平成六年三月二十九日(火)

兼題 『石』『里』『水』 当期雑詠

啓蟄や コンペの案内 次々と 陵南
白木蓮 満開のまゝ 里暮れる 紫杏
蕨手に 里訛りをも 持ち来る 白楊
五輪石 まず如意珠より ぬるむ春 紫杏
春の野に ボタンもう一つ 外しけり 白楊
芽柳や 昏れてなお川 明りせる 白楊

山の香を 集めて匂ふ 姫辛夷 景流
跳び石に 残り雲ある 茶席かな 白楊
風光 凝して咲ける 辛夷かな 景流
石彫りの 仁王の嗤う おぼろかな 白楊
すり胡麻を まぶし春采に 置手紙 紫杏
翳遅々と 移る石庭 冬日和 白楊
芽ぶく木の 幹に空蟬 まだ残る 紫杏
春寒や 石のベンチは 人気なく 陵南
泣き笑い 濡らす春雨 二面石 生雄
まだ脂を 噴く切株や 冬陽にも 白楊
山々の 一山残し 山笑う 紫杏



第五十三回

平成六年四月二十七日(水)

兼題 『初蝶』『おぼろ月』『葉桜』 当期雑詠

吟行 西国二十番札所 洛西『善峰寺』 句座『錦水亭』

兼題句

うなだれて 校門衛る 棕櫚の花 景流
何礙くや 雪柳ある 水車小舎 白楊
おぼろ月 巨船音なく 進みおり 紫杏
花の絮 吹雪けるがごと 橋の上 景流
初蝶の まつわる駅に 降りにけり 信子
カーブして 電車入り来る 雪柳 信子
三味の音の 流れて来たり 月おぼろ 景流
炉塞ぎの 集い終りて 窓暗し 治吉
幼子の 歩み初蝶 まといつく 白楊
春日傘 後追いつがる 紋黄蝶 景流
手料理に 足りぬ土筆を すてかねし 生雄
雪柳 揺れて黒猫 覗きけり 白楊
風少し 寺門くゞりて 雪柳 信子
落葉舞う 道を撰みて 車椅子 景流
紋白蝶 並ぶ電車の 蔭に消ゆ 信子
端居して 土筆の髪を むしり昏る 景流

吟行句

一願を 托し鐘つく 若葉風 景流
春宵の 一刻老は さからえず 四朗
扁額を 見上げる顔に しむ若葉 紫杏
見わたせば 山も野も皆 春霞 紫杏
入相の 鐘の響や 花の散る 景流
筏なす 落ち八重桜 流れざる 白楊
春宵の 一刻酔に 花水木 景流
門跡の 坊の石楠花 夕づける 白楊
紅差せる 合掌仏や 山笑う 白楊

第五十四回

於 協会事務所

平成六年五月三十日(月)

兼題 『靴』『鯖』『夏めく』『新茶』『若葉』 当期雑詠

訪へば 茶を揉みおると 声返る 信子
自転車を押す坂道は 皆若葉 紫杏
大佛の 輝き居はす 山若葉 信子
更衣 軍配軽し 立行司 生雄
氷菓買ひ もらいし釣銭 生ぬくし 紫杏
若葉燃ゆ 術後のゴルフ 靴軽く 四朗
夏めくや 平安絵巻 古都を行く 陵南
一雫 余さずに注ぐ 新茶かな 生雄
新社員 靴紐堅く 結びあり 白楊
ボール蹴る 靴新しく 風光る 白楊

第五十五回

平成六年六月二十一日(火)

兼題 『豆飯』『夏の夕』『青嵐』『滴る』『穴子』 当期雑詠

吟行 洛北『平野神社』より『北野神社』を経 青嵐
て割烹『豊しげ』にて句座 兼題句
青嵐 峽をよぎりて 失せにけり 生雄

陶卓に 影動きいる 青嵐 白楊
浴衣着し 駄々つ児連れの 祭かな 治吉
板長の 奨める句味 穴子蒸し 四朗
袋角 向きそれの 木陰かな 紫杏
売声は 明石駅弁 穴子鮓 生雄
床の灯は 川に瞬き 夏の夕 生雄
艶やかに 地唄舞う妓の 単足袋 生雄
佛前に 今年も初の 豆ごはん 四朗

吟行句

絵馬堂で 一息つけば 青葉風 陵南
青葉風 絵馬古びたる 床几かな 白楊
絵馬堂に 連句もありて 涼しかり 白楊
薫る風 絵馬堂をぬけ 門をぬけ 紫杏
石彫りの 臥牛撫でれば 青葉風 景流
舞殿に 繞らす歌仙 風光る 白楊

俳句同好会参加者

大和 電気 工業(株) 棚谷 四朗
(株) デ リ ブ 林 治吉
光 星 電 工(株) 久保 白楊
(株) 淀電気水道工業所 田中 生雄
(株) オリヂナル電設 石崎 陵南
(株) トーエネック 新谷 景流
堀 電気 工事(株) 堀 信子
日本システム工業(株) 三井喜代治
洛南 電気 工業(株) 原田 恕